

57

山口県美祢の医師浅山良輔と赤間関医学校

中澤 淳¹⁾, 亀田 一邦²⁾¹⁾ 山口大学, ²⁾ 九州国際大学

山口大学が準貴重資料に指定している浅山文庫の書籍を使用していた浅山良輔の活動を中心に、幕末から明治初期の山口県での医学教育と医療活動の一端を報告する。

浅山家は、18世紀初めから萩藩領・四郎ヶ原（現美祢市大嶺町）において代々医業を営み、浅山良輔（1845-1900）はその7代目に当たる。元治元（1864）年から2年間萩において青木研蔵のもとで内科を修業、慶応2（1866）年からは山口藩兵隊病院で外科学を修学した。明治5（1872）年に赤間関医学所（校）に入学、翌年には同医学所助読に任命されている。明治8（1875）年には三田尻公立病院において医術考試を受験し、翌年美祢郡大嶺村において内外科を開業、明治11（1878）年に山口県開業医証書を受領した。明治32（1899）年に長男幡太郎が第三高等学校医学部を卒業し、医術開業免状を受領するのを見届けるようにして翌33（1900）年に逝去した。

長州藩は、天保11（1840）年に南苑医学所（後に好生館・好生堂）を開設し、医学教育と医療政策の推進を図った。また、攘夷戦争に備えて文久3（1863）年に下関に赤間関病院を設置した。廃藩置県の後、山口県は明治4（1871）年11月に、すでに萩から山口に移設していた山口好生堂に医学教育と医療行政を担当させた。そして明治5（1872）年4月には、医学はドイツ式によることとの通達を出し、同年6月から山口県独自の医術考試を始め、また、その7月には医学教育機関として赤間関医学所（校）を設置した。赤間関医学所は赤間関病院の流れをくむものともいわれるが、発足当初は下関唐戸の永福寺や経生寺（教法寺）などの寺院に仮設され、やがて南部町城山（現在下関市役所の所在地）に設置されたようである。幕末に小申（現下関市豊浦町）の庄屋を勤めた高須讓の「松花堂日記」に浅山良輔が同医学所に在籍していたことを示す記述がある。

最近、杏雨書屋・阿知波文庫の「舎密学4巻」の中に「明治4年辛未11月21日始講・西洋1872年正月3日に当ル」との書き込みと、「赤間関医学所」の所有であったことを示す蔵書印の押印が確認された。これは赤間関医学所の開設時期に関する新資料と思われる。

山口県は明治6（1873）年に、山口好生堂・医院を山口から三田尻（現防府市）に移し、翌7（1874）年に華浦医学校・病院とした。明治9（1876）年8月には、赤間関医学校が廃止となり、生徒は華浦医学校へ引き継がれていったが、この華浦医学校も明治10（1877）年に県経費節約のため廃止となった。その後明治13（1880）年10月に三田尻に山口県医学校が再建されたが、これも明治16（1883）年12月に廃止となり、山口県での本格的医学教育機関は、昭和19（1944）年宇部市に開設された山口県立医学専門学校を待たねばならなかった。

長州藩は、嘉永2（1849）年モーニケ痘苗による牛痘接種成功の報を受けると、直ちに種苗を取り寄せて、好生館により藩内各地における種痘の徹底を図った。明治19（1883）年に浅山良輔が提出した家族種痘記録によると、本人は嘉永3（1850）年5月に種痘済みとのことで、長州藩における種痘の迅速な対応ぶりが伺える。

浅山良輔の残した医療活動に関する文書に種痘医としてのものがある。明治16（1883）年の種痘実施記録があり、この年には近在の開業医に種痘術を習熟させている。種痘は自宅において実施していたが、明治28（1895）年4月には種痘場所の移設を上申し、明治30（1897）年に県下美祢・厚狭郡に患者が発生したときには、大嶺村では4箇所の寺院が接種場所に指定されている。